

学校経営のポイント

“オリンピックでの活躍”を教育に生かす

若井 彌一

現在、ギリシャのアテネで開催されているオリンピックで、日本人選手の入賞・メダル受賞ラッシュが続いている。前回のシドニー大会での結果を、最終的には大幅に上回りそうな勢いである。

圧巻は“男子体操団体総合”の金メダル

大会の4日目(8月16日)、体操の男子団体総合で日本チーム(米田、水鳥、鹿島、富田、塚原、中野の6選手)は、国民の期待に応えて優勝した。というよりも、「予想を超えて」と表現するほうがピッタリするほどの劇的な結果であった。

1976(昭和51)年カナダのモントリオール大会以来、じつに28年ぶりの優勝である。28年前、6選手はまだこの世に生をうけていなかった。

日本の体操競技(男子)は、かつてローマ・1960(昭和35)年、東京・1964(昭和39)年、メキシコ・1968(昭和43)年、ミュンヘン・1972(昭和47)年、モントリオール・1976(昭和51)年の各大会で連続優勝するという輝かしい実績をもっている。しかし、モントリオール大会を最後に優勝とは縁がなかった。

まったく“低迷”していたわけではない。他の国々の選手が実力をつけてきて、日本が結果的に後退することになったと評するのが適切かもしれない。

1980(昭和55)年モスクワ・(欠場)、1984(昭和59)年ロサンゼルス・3位、1988(昭和63)年ソウル・3位、1992(平成4)年バルセロナ・3位、1996(平成8)年アトランタ・10位、2000(平成12)年シドニー・4位という成績をたどっている。

このような経過をたどって、28年ぶりに1位に輝いた今大会では、努力が実るときはこういうものだ、と一人ひとりの選手が存分に持ち味を発揮した。最終競技者の富田洋之選手の鉄棒演技の「着地」を、

祈るような気持ちでテレビ観戦していた人々が多かったことと思われる。

入賞・受賞への“継続的努力”を自覚させる

競技大会である以上、勝者がいれば敗者もいる。しかし、オリンピックや世界選手権大会などの場合、勝者だけが高水準の競技能力を有しているわけではなく、例外なく全選手が普通(標準)レベルをはるかに超える実力を有している。

今回のオリンピックで話題となっている一人に、福原愛選手(卓球)がいる。最年少でありながら、ベスト16進出まで果たした。3回戦での対戦相手は、1991(平成3)年の世界選手権ダブルスの優勝者ガオ・ジュン選手(アメリカ)であったが、4 0(11 3, 11 6, 11 8, 11 9)のストレート勝ち。

気合いの入った競技ぶりに、感激したり感動した児童・生徒も多かったに違いない。

まもなく日本の小・中・高校等では夏休みが終わり、授業が再開される。

オリンピックでの日本人選手の活躍ぶりを、ぜひ一度、校長講話や担任学級での話題として取り上げてみてはどうだろうか。活躍している選手の多くは、児童・生徒たちのお兄さん・お姉さんに該当する年齢層である。

栄冠は一朝一夕にして成らず。スポーツも学習も、地道な継続的努力に支えられていることを児童・生徒に理解させ、努力の自覚を促す試みをしてみたい。

(わかい・やいち=上越教育大学教授)

最新資料の全文収録と論点演習！
教職研修 '04 情報版
B5判 270頁・定価 2625円

●新刊案内●

最新刊 好評発売中！

教育開発研究所刊

全国精選小・中41校の実践報告を分析・紹介！ 実際の説明資料やシートなど資料を多数収録！

『「学校の説明責任」を実践から学ぶ』

尾木和英【編集】

B5判 208頁・定価 2500円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください(24時間受付・即日発送)